

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2018年9月1日

文責：JUN

## 子どもの疑問と気づきが読みの深まりをつくる

——「どうぶつの 赤ちゃん」の授業において

### 1 子どもの落ち着きは子どものつながりから生まれる

「読むのは子ども」という鉄則は、いわゆる説明文においても同様である。そして、その子どもの読みを深めるために、教師が、生まれた子どもの読みをこよなく大切にし、その読みが生きて深まるような方向づけをしなければいけないということも同様である。昨年度の三学期、ある学校で「どうぶつの赤ちゃん」という一年生の説明文の授業を観た。それはそのことを端的に示す素晴らしいものだった。

担任のKさんは、落ち着いて学べない何人もの子どもの状態に悩んでいた。確かに、その教室を訪れた私が目にしたのは、絶えずぐにやぐにやとからだを動かしている何人もの子どものすがたであり、そんな子どもの注意を集めようと躍起になるKさんの困惑の表情だった。「何回か一年生の担任をしたけれど、こんなに難しい学級は初めて!」、一学期、Kさんが言っていた言葉である。

そのK学級の子どもの信じられないほど落ち着いたすがたで学べるようになった。私がそんな子どもの様子を見たのは11月の公開研究会のときだった。悩み抜いたKさんが、ある学校の公開研究会で感じたひらめきを実践に移したことからその変化は生まれたのだった。

Kさんがとった手立て、それは、ペアによる学びだった。なかでも、国語の授業において音読をする際は、子どもの机をペアで1個、教科書も2人で1冊にした。すると、片方の子どもが音読するとき、もう一方の子どもが音読の声に合わせて教科書の文を指でなぞったり、隣の声に合わせて小さい声で黙読したりするようになった。もちろん、読み手と聴き手は交代する。こうして、二人がかかわり合って読む「ペア読み」が定着し、そのことによって、またたく間にどの子どもにも学ぶ落ち着きが生まれたのだった。

こうすることによって、音読するという行為は1人で行うものではなくなった。そして、相手は自分のために寄り添い、自分は相手のために寄り添うことになった。うまく読めないときは相手が支えてくれる、読み方を教えてくれる、もちろん相手に対しても同様のはたらきかけをする。こうしてすべての子どもが、文章を音読するということに向き合った。しかも、自分の存在が、自分だけのものではなく、他者のために必要とされた。そのとき子どもは、二人で行う音読という行為に集中するようになったのだ。こうして、そのペアによる学びへの集中は、音読以外においても発揮されることとなった。

これは画期的なことである。困難を極めていたころ、Kさんは自分の指導でなんとか子どもたちを落ち着かせよう、しっかり学べるようにしようと努めておられたのだろう。しかし、ここで行われたことは、学びを子どもと子どもの共同作業にすることだった。そうしたら見事に落ち着きが生まれ、子どもは学びに向かうようになった。教師の懸命の指導ではなく、子ども相互のかかわり・つながりによって学ぶ意欲を生み出したというこの事実の持つ意味はとても大きい。

## 2 一つの疑問、二つの気づきが出る素晴らしさ

さて、「どうぶつの 赤ちゃん」の授業での出来事について考えてみることにしよう。

20分近い音読を終え、Kさんは、カンガルーの赤ちゃんについて書かれた部分について、ペアで感じたことを聴き合うように指示した。子どもたちは、さっきまで寄り添うように音読していた親密さそのままに語り合いを始めた。教科書の文章を指差したり、微笑み合ったりするその表情がなんとも愛らしい。

しばらくして、「じゃあ、聴かせてくれる？」とKさんが子どもたちに声をかける。何人もの子どもの手があがる。その中に、かつて落ち着かない子どもの一人だったすみとがいる。吸い寄せられるようにKさんがすみとを指名する。指名されたすみとは、瞳をぱっちり開いて、次のように言った。

すみと「なんで袋の中にお乳があるの？」

すみとは、ほんとにどうしてなの？という言い方をした。音読をしながら、ずっとこのことが気になって仕方がなかったのだろう。ということは、彼は、書かれている事柄について考えながら音読するというもっともよい読み方をしていたにちがいない。しかも、彼の疑問は、カンガルーの赤ちゃんを読む核心をついている。それが、これまでなんと落ち着かせたいと願って対応してきたすみとが出してきたことなのである。Kさんにとっては予想外のことだったと思われる。

この彼の疑問以降の子どもとKさんのやり取りは次のようになっている。

Kさん「どこに書いてある？」

すみと「書いてない」

子どもたち「書いてあるよ」

Kさん「ほんと？ どこ？」

みちる「ここ」

Kさん「なんて書いてある？」

としき「ふくろの 中で、おかあさんの おちちを のんで 大きく なります」

Kさん「って書いてあるから、すみと君は袋の中にお乳があるってわかったんだよね」

りん「『くらべて』って書いてあるから、あかちゃんを比べてみたら、しまうまの赤ちゃんが一番大きくて、カンガルーの赤ちゃんがいちばん小さい」

Kさん「どう？」

としき「ぼくもそう思う」

Kさん「しまうまがいちばん大きい？」

けんた「やぎぐらいの大きさ」

Kさん「ライオンは？」

子どもたち「こんくらい」「こねこぐらい」「こんくらいーい」

すみと「30分もたたないうちに立ち上がった」

Kさん「カンガルーは？」

子どもたち「1円ぐらい」「こんくらい」「ちっちゃい」

Kさん「1円ってどのくらい？」(実物の1円玉をみせる)

子どもたち「本物?」「本当のおかね?」「本物だ」

Kさん「カンガルーの赤ちゃん、これくらいだっ。読んでごらん」

Kさんは、すみとがこういう疑問を考えていたこと、そしてそれを積極的に挙手して語ってくれたことがうれしくてならなかったにちがいない。だから、彼の言ったことが本文のどこからわかるのか明らかにして、しっかり受け止めている。文章に返して確かめるということは読みの基本だから、そういう点からも妥当な対応である。

すると、ここでりんが口を開く『くらべて』って書いてあるから、あかちゃんを比べてみたら、しまうまの赤ちゃんが一番大きくて、カンガルーの赤ちゃんがいちばん小さい」と。「～と書いてあるから」という言い方が示すように、この子の気づきは、本文に返したから出てきたことである。しかも、ライオン・しまうまの赤ちゃんと「比べてみる」という考え方は、この説明文の軸になっていることである。

子どもは素晴らしい。「なぜ袋の中にお乳があるのか?」というカンガルーの特質、そしてそれを他の動物と「比べる」という考え方、こういう読みの核心をいとも簡単に出してくる。

ライオンとしまうまとの比較について、子どもは「大きさ」に着目してきた。文章が「カンガルーの赤ちゃんは、生まれたときは、たいへん小さくて、一円玉ぐらいのおもさです」で始まっていることを考えると自然な成り行きだ。

ここで、Kさんは、本物の1円玉を出す。準備していたのだ。しかもそれを、子どもから「1円玉」が出て来たところで出した。このタイミングの良さが、子どもたちの視線を引き付けただけでなく、新たな気づきへと誘った。1円玉を見せながら「こんくらいだっ」とKさんが言ったその瞬間、Kさんの目の前のいちばん前の席に座っているみどりがつぶやいたのだ。

みどり「ちがう。重さ」

みどりは、「生まれたときは、たいへん小さくて、一円玉ぐらいのおもさです」となっている本文を正確に読んでいた。この文には「小さい」ということも書かれているが、1円玉は「重さ」のたとえとして書かれている。彼女はそれが読めていたのだ。

Kさんは、このみどりのつぶやきを咄嗟に受け止める。

Kさん「みどりちゃんが気づいたことがあるっ。聴いて」

みどり「重さだからちがう」

Kさん「大きさじゃなくて重さだっ。言うんだけど、どう?」

子どもたち「合ってる」

子どもたち「1円玉ぐらいの重さ。1円玉ぐらいの大きさじゃない。重さ」「軽い」

Kさん「みんな1円玉触ったことあるでしょ。重い?」

子どもたち「軽い」

Kさん「じゃあ、もう1回（教科書の文章を）読むよ」

何人もの挙手の中からすみとを指名し、彼の疑問を受けとめた対応、みどりのつぶやきに耳聴く気づき、カンガルーの赤ちゃんは小さいだけでなく「軽い」ということを取り上げた対応、こういう二つの対応が、こんなに温かくできるということに、Kさんの子どもに対する姿勢、学びに対する心構えが表

れている。そう考えると、前述した「ペアによる音読」による子どもたちの変化も、単に「ペア読み」を取り入れたからだけで生まれたのではないということがわかる。Kさんの、子ども一人ひとりへの丁寧で温かな対応があったからこそである。

### 3 子どもの読みを深めるために

このようにKさんの子どもへの対応は、授業を観ていた私を温かい気持ちにさせてくれるものであった。その一方、すみとの疑問とみどりの指摘には、さらなる学びの可能性が含まれていることに気づいた。何が起こるかかわからない授業の場で瞬間的に実現するのは難しいことだけれど、もしKさんにその気づきがあったら、この二人の考えは大きなインパクトをもってすべての子どもの学びにつながっていたにちがいない。そう思うので、授業の一つの研究として、そのことについて述べてみようと思う。

この私の気づきは、すみとの疑問とみどりの指摘につながったときに生まれた。

本文には「なんで袋の中にお乳があるの？」という疑問への直接的な答は書かれていない。だから、すみとは、あのとき「書いてない」と言ったのだ。みちるやとしきが持ち出した「ふくろの 中で、おかあさんの おちちを のんで 大きく なります」という文から、袋の中にお乳があることは読めるが、それはなぜなのかは書かれていない。そういうことから言うと、すみとの疑問はまだ解決していないのだ。

そして、みどりの指摘した「1円玉の重さ」だけれど、それは「大きさ」ではなく「重さ」を表しているということだけで済ませてはならない大切なことを含んでいる。それは「おかあさんのおなかにはい上がり、自分の力でおなかの袋に入る」という「生きるための行動」を可能にする重さなのだ。それくらいの重さでないとそれはできないということなのだ。そして、何のためにそうまでしておなかの袋にはい上がるかという、そこにお乳があるからだ。つまり、すみとの疑問とみどりの指摘は、カンガルーが生きていくためのありよう、それが赤ちゃんに端的に表れているのだが、それを読む確かな方向を打ち出してきているということなのだ。

そう気づいたら、お乳が袋の中にあること、1円玉のたとえば大きさではなく重さだとわかるだけでは不十分である。この二つをつないで、生きていくためのカンガルーの生態の素晴らしさに迫らなければならない。すみととみどりは、そのための貴重な素材を出してくれたのである。

では、どういう手立てが考えられるだろうか。こんなことも考えられる。

「すみとくんは、カンガルーの赤ちゃんは袋の中でお乳を飲んで大きくなると言ってくれました。そして、みどりさんはその赤ちゃんは1円玉くらい、そんなに軽いのだと言ってくれました。カンガルーの赤ちゃんはどうしてそんなに小さくて軽いのだろう。それを、すみとくんの見つけたこととつなげて考えてみましょう」

そう問いかけて、本文をしっかり音読させて、ペアで考えさせるのだ。そうすれば、重かったら生まれたばかりでは袋にはい上がれないということがわかってくる。つまり、そんなに小さく軽く産むのは、袋の中で育てるという大前提があるからだ。

そうしておいて、すみとの疑問をもう一度持ち出す。

「すみとくんは、そんな袋の中に、なんでお乳があるの？と尋ねましたね。さあ、ペアで考えて、すみとくんに答えましょう」

と。このように順に考えてくれば、袋に到達した赤ちゃんは、まだ目も耳もどこにあるのかわからない

小さな軽い存在で、当然、大きくなるにはお乳が必要だということに気づくのは難しいことではない。人間である自分たちもそうだったからである。つまり、お乳があるのは赤ちゃんが大きく育っていくためだと気づける。しかし、それだけでは、まだすみとの疑問は解けていない。お乳が必要なのはわかるけれど、それがなぜ袋の中になければいけないのか、というより、なぜ袋が必要なのかということになってくるにちがいない。

文章には「おかあさんの おなかの ふくろに まもられて あんぜんなのです」と書かれている。子どもたちの目は、きっとこの文に注がれる。

すみとの疑問が出たとき、りんという子どもが「くらべてって書いてあるから、あかちゃんを比べてみたら、しまうまの赤ちゃんが一番大きくて、カンガルーの赤ちゃんがいちばん小さい」と語っていたことを思い出してほしい。あのとき、しまうまと比べることに子どもが言及していた。こういう子どもの言葉はしっかり覚えておかなければならない。それをここで持ち出す。

「さっき、りんさんが『くらべて』って書いてあるからと言って、しまうまの赤ちゃんと比べてくれたね。それで、今、読んでいるカンガルーの赤ちゃんのことをしまうまやライオンの赤ちゃんと比べてみようよ。比べてみたら、みんなはどんなことを思うかな？ ペアになって、まず全部音読して、それから聴き合ってみて」

ここに述べたことは、あくまでも、推測の展開である。こうしたほうがよいということではない。手立てはいくらでもある。

ただ、私が述べた手立てには大切にしたい原則がある。それは、子どもの出してきた疑問や指摘や気づきを基にするということである。すみとの疑問、みどりの指摘、りんの気づき、それらに基づかないで、教師の思惑だけで出していくのとは大変なちがいである。こうすることで何が生まれるかだが、それは、自分たちで読んでいるという子どもの意識でどこまでも読んでいけるということである。つまり、教師の対応が「わからせる」「指導する」ということではなく、「支える」「方向づける」ということになる。

しかし、何が起きるかわからない授業の場で、こういう手立てを咄嗟にとるということは簡単なことではない。だからと言って、事前に用意しておいた発問で考えさせていく教師主導の展開をよしとするわけにはいかない。だから、咄嗟に判断できる対応力を磨くしかない。もちろん、それは簡単には身につかない。何年もかかるだろう。学級担任を離れるなどして授業から離れるときになっても、納得できる状態になっていない可能性もあるとも言える。

私は、それでもよいのだと思っている。最後まで、納得を求めつつけることに意味があるのだと思っている。それは、どんなことでもそうだが、簡単に身につくものほど本質的ではないからである。本質的なものほど、それは遠くにあるものであり、人の人生は、それを求めて歩き続ける旅のようなものだと思うからである。

それにしても、Kさんの授業、Kさんの学級の子ども、そして、Kさんに、私は深く深く感動した。その子どもたちが、Kさんを悩ませるほどの難しさを抱えていたということは、教師たちに大きな示唆を与えてくれるだろう。どんな状態であっても、諦めず子どもに向き合う教師、そして、子どもの事実から学ぼうとする教師に対して、子どもたちはこんなにも素晴らしい贈り物をしてくれるのだ。

この報告に読む教師たちにこの感慨を抱いてもらいたい、私は切にそう思う。

## 第20回授業づくり・学校づくりセミナーを終えて

19年間続けて来たホテル開催に終止符を打ち、名古屋国際会議場という公共施設による初めての開催となった第20回セミナーは、申込者数552名（実際は何人かのキャンセルあり）に達するとともに、講師の先生方、報告者の方々のおかげで中身の濃い二日間にする事ができた。すべての方々に感謝である。

ホテル開催を断念したのは経済的理由からである。どこからも金銭的援助のない本セミナーにとって、内容の深まりを目指したいとは思っても経済的に立ち行かなくなってしまうこともできない。これまでのホテルの快適さと同じようにはいかないが参加者の皆さんに理解していただけられたらと思って開催したがおおむね好評だった。名古屋国際会議場が素晴らしい施設であったことと、会議場の担当者の方々にくつものご理解をいただいたことも大きかった。ありがたいことである。

公共の施設であるため、特に使用に関する制約があったのは仕方のないことであった。たとえば、午後1時から借りているため、ホールの前での受付も1時以前には始められない。そのため、参加者の皆さんには列を作って受付を待ついただくこととなった。また、全体会の会場となったホールは机を入れるスクール形式の定員が450名だったため、後ろ3分の1を椅子席にせざるを得なかった。ご希望の方々に参加していただきたく一部スクール形式を崩すという苦渋の選択をしたのだった。にもかかわらずほとんど苦情らしい苦情を耳にしなかった。ご辛抱いただいたのだと思う。

また、これまでホテルに宿泊していた方にとっては、1日目終了後会議場を出てご自分で予約しているホテルまで移動してもらわなければならなかった。そのことに面倒さも感じていただいたにちがいない。ご容赦いただきたい。

もう一つ。主催者の私たちにとってもっとも難しかったのは、申込受付と参加費集金業務だった。これまで10年近く旅行会社に委託していたものを、経済的なことから今回は自前で行うことにした。そのため、参加者の皆さんにはわかりにくいこともあったと思うし、業務を担当した者もさまざまな事例への対応が必要となり、その都度の対応に苦慮した。今回の経験は必ず来年に生きるようにしたいと思う。皆さんにご迷惑をおかけしたことについてはおゆるしいいただきたい。

さて、大切な2日間の内容であるが、小中一貫校の学校づくり報告、社会科の授業報告、地域における美術の取り組み報告が一日目。二日目は、小学校2つ、中学校1つの分科会における国語科、算数科、数学科、理科の授業報告が午前中にあり、午後は「学びを深める対話」をテーマとした鼎談、そして、佐藤学先生の講演と続き終了した。

参加者の皆さんが、このうちどのプログラムでどのような感想を抱き、何を学び取られたのかは、アンケート用紙にも書かれていたようにその人によってさまざまだったにちがいない。ただ、当日及びセミナー以後に耳にする皆さんの声や、アンケート用紙に書いていただいたことから、多くの学びとインパクトを受け取っていただいたようである。それを知ること、セミナーを続ける勇気ももらいさまざまな苦勞が吹き飛んだ。ご参加、ご協力に深く感謝している。

来年の第21回セミナーは、今年と同じ「名古屋国際会議場」において、7月29日(月)～30日(火)に開催することにした。一年後を楽しみに、それまでよろしければ月例会におこしいいただきたい。また、ホームページを通じてこの「学びのたより」をご愛読いただきたい。